

信濃教育

巻頭言

古畑任三郎

俳優の田村正和さんが亡くなられた。七十七歳というから喜寿を過ぎたばかり。残念である。田村さんの代表作の一つはなんといっても「古畑任三郎」だろう。私は、和製「刑事コロンボ」を思わせるこのドラマを楽しみに見ていたひとりである。

殺人事件を起こした犯人が、古畑にいつから自分を疑っていたのかと問う場面を私は印象深く覚えていて。

「最初にあなたにお会いした時、あなたはスタミナドリンクを飲んで私と会いました。深夜にそんなことをしたら眠れなくなるだろうに。これから来る刑事と対決するために飲まれたんじゃないかと思いました。」

と、古畑は独特の口調で答えた。古畑が最初に感じた違和感、刑事の勘と言ってもいいかもしれないが、古畑のなんとなく感じたことが、その後いわゆる客観的な証拠と相まって、犯人の逮捕に結びついていく。

最近、教育の世界はこの「なんとなく感じる」ことが軽視されているように思う。何らかのデータや数値が、科学的、客観的、と言われもてはやされる。何らかの検査の結果得られる数値をもって、この子はこういう子だと、言われる。教員もそれで納得してしまう。

私は客観的な評価や分析を否定しているのではない。それはとても大事なことだし、子どもをより理解するためや、指導・支援の方策を考える有力な情報であることは間違いない。しかし、毎日子どもとともに暮らし、子どもをいつも見ている教員の「なんとなく感じること」はもっと大事にされていいのではないだろうか。子どものことをいつも考えている教員は、自分の「なんとなく感じること」にもっと自信を持っていけないだろうか。「なんとなく感じる」力は、教員の重要な「非認知能力」であると思うのだが。

田村正和さん扮する古畑任三郎は、あなたが怪しいと最初からなんとなく感じた、と言ったのである。